

# 祈りを込めて



妻が我が家の小さな生け垣を手入れたあと、「どうしたのかな」と独り言をつぶやいています。生け垣の中に1円玉と10円玉が数個落ちていたということです。自宅は緩やかな登り坂のふもとに位置しており、

一息ついている時に誰かがそこで財布を開けて、誤って落としたのかもしれませんが。わずかな金銭といえども何か得した気分になり、「ラッキー！」などと浮かれていました。ところがそれから数週間後でしょうか、再び同じ出来事が起こったのです。どなたか分かりませんが、どうやら願掛けか樹木に対する祈りが込められているようです。お賽銭のような感覚で、生け垣の中にそっと置き入れたのでしょう。ちっぽけな生け垣に対するその方の想いに頭が下がると共に、悪ふざけをしていた自分を恥じました。

以前から一つの疑問を持っていました。仏教は日本に伝来してすんなりと受容されたにもかかわらず、なぜ輪廻の思想だけは定着しなかったのか。産声を上げたばかりの国家は大陸の前例に学び、その異国の思想を政（まつりごと）へ活用しようと目論んだと推定されています。しかし輪廻説だけは結局受容されませんでした。チベットなどの仏教徒は、今でも輪廻説を心から信じているようですが、現在の日本でこれを信じている人はまずいないのではないのでしょうか。ご存知のとおり輪廻の思想は、次々と生を繰り返すという思想ですが、その最大の特徴は、新たな生が前世の出来事に応じて動物、虫など人間以外の存在にも生まれ変わるという点にあります。日本では例えば「この孫はおじいちゃんの生まれ変わりだね」などの表現に見られるとおり、人間は人間に生まれ変わるのであって、人間としての生が繰り返されるというのが、この国の土着思想であるように思えます。その思想には四季が繰り返されるように、あるいは四季の中で樹木の息吹が繰り返されるように、人間の生も次の人間のいのちとして繰り返される、という論理が根底に存在するように思えます。

日本の国土は大半が森林に覆われており、昔から樹木は日本人にとって身近に感じられる神々しい存在だったと想像します。鎮守の森等で巨木を目の当たりにする機会も多かったに相違なく、その際に想像を超えた時の流れに圧倒され、そこに何らかの宗教的意識を感じることは日常的だったこと

でしょう。その精神は現代人にも受け継がれており、例えば屋久島に縄文杉を見に行く人々は、悠久の時空間を静かに見守り続けてきたその存在に寄り添いにいくのだと思います。何かの機会に、日本人はいのちを樹木に重ねて理解する植物的生命観を持っている、という論文を読んだことがあります。そこでは妊娠を意味する「身ごもる」の「身」が、「実」に通じる可能性を指摘していましたが、考えてみれば自己の姿や能力が現れることを「芽生え」と表現するなど、その論文の見解を示唆する表現は多々あるのかもしれませんが。日本で動物等へ輪廻する思想が受容されなかったのは、一つにはこの繰り返す植物的生命観を日本人が持っていたからではないかと、私は推測しています。

日本の風土は穏やかな四季の変化に包まれています。毎年同じように春の桜、夏の蝉、秋の紅葉、冬の静けさを繰り返し、往く年も来る年も必ず同じ経過を辿るのです。死の宣告を受けた患者が「来年の桜は見られるだろうか」などと考えるのは普遍的で、四季の変化と共に樹木や私たちの生命は必ず来年も繰り返されるという大前提の観念が、私たちの心の深奥に染み付いています。一方諸外国ではそうはいかないようです。殺伐たる岩石の山肌の広がりや、スコールを伴う熱帯地方などは、日本の風土とはあまりにもかけ離れた光景です。日本は狩猟採集生活を営んでいた期間が一万年も続いた、世界の中でも類を見ない稀有な土地と言われています。恐らく四季の繰り返しに合わせて、ガラパゴス化するまで大切に守り続けてきた生活スタイルが、植物的生命観を育ててきたのでしょう。ガラパゴス化は経済的にはマイナスかもしれませんが、文化的には誇れることだと私は考えます。日本人が持つ植物的生命観は、植樹という記念行事に想いを込めたり、亡くなった近親者の姿を可憐な花に重ねるなどにも現れているのです。

冒頭の話ですが、「お賽銭」を置いていく方がどなたなのか、未だ分かってはいません。しかし「お賽銭」はその後も、生け垣の中に不定期に見出されています。紙面を見れば、目を背けたくなるような事件だらけの今生の世の中。それだけにこの町角の小さな、小さな出来事には、祈りに支えられたかつての日本人の姿が現れているようで、感動せずにはいられないのです。